

氏 名 郷原 志保 (ごうはら しほ)
学位の種類 博士 (老年学)
学位の番号 博甲第 133 号
学位授与の日付 2026 年 3 月 17 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目 地域在住高齢者における Advance Care Planning の
プロセスモデルの構築と活用可能性の検討

論文審査委員 (主査) 桜美林大学教授 中 谷 陽 明
(副査) 桜美林大学教授 新 野 直 明
桜美林大学教授 渡 辺 修 一 郎
放送大学名誉教授 石 丸 昌 彦

論文審査報告書

論文目次

第 1 章 序論	1
I. 研究の背景	1
II. 本研究の目的と意義	6
III. 本論文の構成	6
IV. 用語の定義	7
第 2 章. 地域在住高齢者における Advance Care Planning のプロセスの解明	8
I. 研究の背景	8
II. 目的	9
III. 方法	9
IV. 結果	11

V.	考察	26
VI.	本研究の限界と今後の課題	36
第3章.	ACPのプロセスモデルの構築と活用可能性の検討	37
I.	先行研究との比較	37
II.	目的	39
III.	方法	39
IV.	結果	41
V.	考察	54
VI.	本研究の限界と今後の課題	58
第4章.	総合考察	61
I.	本研究の特徴	61
II.	本研究の主要な知見	61
III.	本研究の限界と今後の課題	62
IV.	モデルの活用可能性について	63
	謝辞	66
	引用文献	67
	資料：インタビューガイド	76

論文要旨

本論文の目的は、地域在住高齢者の Advance Care Planning (ACP) において、どのようなプロセスを辿るのか、またどのような要因が関わっているのかを解明し、そのプロセスモデルを構築することである。さらに、そのプロセスモデルの実践への活用可能性についての検討も行われている。研究内容の構成は、地域在住高齢者を対象にしたインタビュー調査をもとに、地域在住高齢者の ACP のプロセスを解明する調査研究と、プロセスモデルの構築とその活用可能性について、フォーカス・グループ・インタビューによるエキスパートインタビューと地域在住高齢者とのディスカッションを行った調査研究の2つのパートから構成されている。

1 つ目の研究は、自身の人生の最終段階に関して家族や重要他者、またはかかりつけ医や地域の保健師などの医療専門職などと話し合い経験のある地域在住高齢者 10～20 名を選定し、半構造化面接を行っている。インタビューの内容は、①自身の人生の最終段階について考えるきっかけとその際の心境、②家族や重要他者等に自身の考えや思いを伝えるにあたっての心境の変化やきっかけとなる出来事、③家族や重要他者等と話し合う中での自身の心境や行動の変化、④話し合う際に影響を受けた人や出来事などである。分析方法は、インタ

ビューデータから逐語録を作成し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いている。分析結果としては、「人生の最終段階について考えるプロセス」の構造として 47 の概念を生成し、継続比較分析により 5 つのカテゴリー、【死の意味づけ】【老いとの対峙】【肯定的受け止め】【家族との関係文脈】【言葉にすることへの回避】と、11 のサブカテゴリー、《老いの不自由さ》《孤独感の喚起》《死との接近経験》《故人との繋がり》《身終いの準備》《家族であること》《家族内での存在意義》《胸の内に抱える》《伝えることへの躊躇い》《人生の伴走者》《居場所探し》を抽出している。さらに、次のようなストーリーラインを導き出し、プロセスモデルとして提示している。ACP のプロセスは、自らの老いとの対峙に始まり、身近な人との死別経験などを通して死を意味づけすることで、自身の最期を意識するようになる。しかしながら、家族との関係性や親意識などの影響により、直接的に言葉で自分の思いを伝えることへの躊躇いや抵抗感を感じている。そのような状況の中、一歩踏み出す後押しとなっていたのが情緒的サポート者の存在であり、ACP を促進させる重要な要因である一方、情緒的サポート者不在の場合には、常に不安定さや焦燥感を抱いている状態となり、向き合うべき課題を先延ばしにしたり回避する傾向にある。

2 つ目の研究は、作成したプロセスモデルの適切性、包括性、理解可能性について検討するために、高齢者の保健医療福祉の専門家 4 名とフォーカス・グループ・インタビューを行っている。さらに、地域在住高齢者の考えや価値観をモデルに取り入れることが必要と考え、機縁法で募集した医療福祉サービスの利用や介護保険サービスの利用経験のない元気な高齢者と、表現の明確性やプロセスとしての順序性、整合性、不足内容についての意見交換を行っている。分析方法は、構造構成主義的質的研究法 (SCQRM) を用い、最終的に、「認知」「準備」「葛藤」「対峙」「行動」および「回避」といった構成要素からなるプロセスモデルを構築している。また特に、情緒的サポートの有無が ACP プロセスの促進・回避の鍵握ることが示され、これまでの先行研究では十分に位置づけられてこなかった「情緒的サポート」という側面の重要性を新たに理論的に示した点が、本研究の大きな特徴であると結論づけている。

総合考察においては、構築したプロセスモデルは、ACP の初期段階である意思形成および意思表示のプロセスを詳細に可視化した点において独自性があると指摘しており、地域在住高齢者に対する介入プログラムの開発、さらにはエンディングノート等の支援ツールの構築に資する実践的な示唆を提供するものであると述べている。またモデルの活用可能性についても、地域包括ケアの実践現場における ACP 支援の質向上に資する有効な枠組みとなり得る可能性があり、高齢者が安心して意思表示するため関係性の土壌づくりや、本モデルを基にした教育プログラムや支援ツールの開発、地域における多様な実装事例の検証および評価研究へと展開していくことが期待されると述べられている。

論文審査要旨

本論文が取り上げた ACP は、少子高齢化が進む現代社会が取り組むべき課題として意義深く、研究の蓄積が少ない ACP のプロセスを解明するという点からも独創的なものである。地域在住の高齢者や保健医療福祉領域の専門家へのインタビューから収集した質的データを分析する研究手法は、概ね妥当なものである。さらに、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法や社会情動的選択性理論を基盤とした理論的考察を駆使した分析も、丁寧に行われている。本論文の主要な知見は以下の 2 点であろう。第 1 に、わが国の文化的背景を取り入れた ACP のプロセスモデルの試案を提示している。第 2 に、ACP の促進・阻害要因として「情緒的サポートの有無」を明確にし、実践での活用における様々な可能性を示唆している。いずれも独創性・新規性があり、学術的な知見として高く評価できる。

一方で、以下のような課題があることも指摘された。インタビュー対象者の地域在住高齢者の選定が、依頼した選定者の主観に影響されているのではないかと、また選定された対象者の ACP にかかわる経験が質・量ともかなりばらつきがあるのではないかとといった点が、インタビュー内容のバイアスとなり、データの妥当性に影響している可能性がある。プロセスモデルの構築において、概念やカテゴリーの再編成のプロセスの記述がわかりにくい。本研究の課題や限界についての言及が不足気味である。

指摘された課題については、修正・追加等を加えることによって最終稿が再提出され、最終的に博士学位請求論文として、十分な水準なものであることが、確認された。

口頭審査要旨

論文内容についての約 30 分の口頭発表の後、主査・副査の委員による、以下のような質疑応答が行われた。最初に、構築した ACP のプロセスモデルは、家族など高齢者の周りにはいる人々との関係性が重要な要因として抽出されたものとなっているが、今後さらに増加するであろう独居高齢者に対しては、このモデルの妥当性、有用性はどのようなものかが問われた。この点については、家族等からのサポートに代わるものとして、地域の人々からのサポートも視野に入れることが可能であるという回答であった。そこでさらに、地域からのサポートが、どのように具体的に ACP のプロセスに関わってくるかが問われた。回答としては、地域包括ケアシステムにみられるような、地域でのネットワークを構築しサポートすることが考えられるということであったが、より具体的なサポートのあり方については、今後の課題であることが述べられた。さらには、より一般的なモデルの活用可能性についても、その有効性は確信できているの

という問いかけには、これまでのポピュレーションアプローチ的なものとは違った効果を期待しているが、有効性の検証を引き続き行うことが重要であることは認識していると述べた。

また、プロセスの検証については、経時的にデータを収集し分析していくことが必要ではないかという問いに対しては、縦断的なデータ収集の必要性は十分理解しているので、今後の研究の課題としたいと述べられた。その他の質疑応答についても、概ね妥当かつ満足の行くのもであった。

以上から結論として、本論文が博士学位請求論文として合格であることを、主査・副査の全員の合意によって確認した。

以上